

聖書：ピリピ人への手紙4章8～23節

説教：満ち足りることを学びました

1 「私から学び...実行しなさい」

パウロは、エルサレムにいたとき騒ぎを起こした犯人として逮捕され、ローマへ送られ裁判にかけています。裁判の行方次第では死刑になる可能性もありました。

このことを伝え聞き、心配したピリピの教会はテモテとエパフロデトのふたりに贈り物を持たせ、パウロの所に送り、励ますことに決めます。このことに感謝してパウロは手紙を書くことにします。とは言え、ピリピ教会はかつてパウロが開拓した教会です。心配なこともあります。それでいろいろなアドバイスのことばも書きます。

今日の箇所もそうです。たとえば9節を読みます。「あなたがたが私から学び、受け、聞き、また見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神があなたがたとともにいてくださいます。」

私から学んで、学んだ事を実行しなさい。そう言っています。でも、どうでしょうか。確かにパウロはすばらしい信仰者でありキリスト者として模範となる人ではあったかもしれません。けれども、当の本人から「私から学びなさい」と言われると、なんとなく胡散臭く思わないでしょうか。今までさんざん、そんな人を見たり聞いたりして、裏切られてきましたから、「私から学びなさい」という人をなかなか信用できないのです。

パウロはどうしてこのようなことを言ったのでしょうか。そもそもいったい何を学びなさいと言っているのか。今日はその所を掘り

下げていきます。

2 「私は...学びました」

自分で何もせず、手を汚さず、「あなたはこれをしなさい。あれをしなさい」と言われると、ムカッと来ることがあります。でも、「私も一緒にやるので、あなたもやってくれませんか」と言われると、少しは素直に聞くことができます。パウロの場合はどうでしょう。11節にこうあります。「乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。」

ピリピ教会に対して「私から学んでください」と言ったパウロは、なにもしなかったのではない。どんな境遇にあっても満ち足りる事を自分も学んできたのだと告白しています。

いったい、どんなふうに学んできたのでしょうか。以前も触れたことですが、パウロは裕福な家庭に生まれ、英才教育を受け、エリートコースをまっしぐらに走っていた人です。頭の回転の速さ、抜群の記憶力、行動力、どれをとっても非の打ち所がありません。当時のメジャーな宗教グループであったパリサイ派の将来を背負って立つ若手で、キリスト者を自由に逮捕できる権力を手にしていました。今のことばで言えば、宗教警察の高官です。富と知性と権力。人が欲しいと思っているものすべてを彼は手にしていました。

それがあつた日、ダマスコに向かう途上で、

よみがえられた主に会い、突然の回心をいたします。その日から、彼の人生は百八十度変えられていきます。すべてのものを失い、パリサイ派の仲間からは、裏切り者扱いされ、いのちを狙われるようにもなります。

キリスト者になってからどれだけ苦労したか。第二コリント 11 章 25 から 27 節にこうあります。「むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。」

11 節で「私は、貧しさの中にある道を知っており、豊かさの中にある道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています」と言っていますが、決して嘘や誇張ではない。富むことも飢えることも両方経験してきたのです。それまで何不自由なく暮らし、満たされた生活をしていたパウロが、ありとあらゆるものをぎ取られ、ときには着る物さえなくなって裸にされていきます。

パウロは、「私はどんな境遇にあっても満ち足りることを学びました」と言っています。最初から知っている事なら学ぶとは言いません。知らないから教えてもらう。それが学びです。

あらゆるものを失ったとき、お金さえあればこんなことにはならないのにと、かつての自分を思い出して泣くこともあったのだろうと思います。そんなところを通されながら

ですが、少しずつ学んでいきました。

「私から学びなさい。」パウロは、なにも苦勞もせず、手を汚そうともせず、高いところに立って言ったわけではありません。苦しみを通して彼自身も学んでいきました。

3 満ち足りる

では、いったい何を学んだのか。どんな境遇にあっても満ち足りることを学んだ、とあります。

人の心には様々な願いがあります。その願い事のもとをたどっていけば、結局、「私は満ち足りたい」という思いにたどり着くと、言ってよいかもしれません。多くの人たちは、満たされたいという飢え渴きの思いをいやすために、この世の何かを買い求めていきます。しかし、満たされることはありません。それは皆さんも経験して知っているとおりでです。

では、私たちが本当の意味で満たしてくれるものはなんなのでしょう。「もちろんイエス・キリストです」と、皆さんはすぐに答えるでしょう。そのとおりで。しかし、現実はどうですか。イエス・キリストを知り、信じておられる皆さんは、十分に満たされていますか。少なくとも、私はどこか満たされていない、どこかにまだ大きな穴が空いていると感じています。こうやって高いところに立って偉そうに聖書のことばを語っていますが、まだどこか満たされていないと言わなければならない者です。

パウロはどうなのでしょう。彼は何によって満たされると考えていたのでしょうか。ヒントは 14 節です。「それにしても、あなたがたは、よく私と困難を分け合ってくれました。」

ピリビ教会は、遠く離れたローマにいる自

分のことを心配し、祈ってくれた。そしてわざわざテモテとエパフロデトとを送ってくれた。そんなピリピの人たちの心を知ったとき、自分は満ち足りた。そう言っています。

パウロは、いま牢につながれ自由はありません。死刑になれば、明日のいのちはない。そういう中にあっても自分は満ち足りました、と言える。本当でしょうか。「これは外交辞令、お世辞ではないのか。」そう思いますか。

極端な例を挙げてみましょう。人もうらやむほどのお金、知性、能力、健康、権力、名声、この世の宝をすべて手にしているとしましょう。しかし、あなたには家族がいません。友達もいない。自分のことを心配してくれる人はだれもいません。風邪を引いて熱を出し、一週間寝込んでいたのに、心から心配してお見舞いに来るお客はいない。どうでしょうか。それでも幸せだと思いますか。むしろ、ひどい孤独感を覚えるのではないですか。むなしさを感じないですか。この世のすべてのものを手にしたとしても、あなたのことを心配してくれる人がいなければ、このとおりです。

ということは、何が本当の宝なのでしょう。あなたを心から心配してくれる隣人ではないですか。どんなに貧しくても、病気であっても、心から自分のことを心配してくれる人がいる。自分が困っているときに、涙を流して話を聞いてくれて、親身になってくれた。そういう経験はあると思います。そのとき皆さん何を感じましたか。心の中に不思議な平安を感じることはなかったでしょうか。問題が解決したわけではありません。でも、自分のことばに耳を傾け、苦しみを知ってくれる人がいる。そのことがどれだけ励みなったか。そんな経験をお持ちのほうです。

ある方は、私のことを心から理解し心配してくれる人はいません、と言うかもしれません。これまでいろいろな人に期待してきたけれど、裏切られてきた。もう人は信用できない。そういう方もいるでしょう。

でも、私たちの主はどうですか。苦しむ私たちといつしよに苦しみを分かち合おうとされます。ご自分の手が汚れることも気にせず、私たちの罪を背負うために、「あなたの罪をわたしによこしなさい」と言ってくださいます。この方は、私たちの苦しみを知ってくださいます。ただ知るのではなく、ご自分もいつしよに苦しみを味わおうとされます。主は私たちの隣人となってくださいました。主もすべてを失っていかれた。たとえ死を目の前にしても、たとえ死んだとしても、私たちはひとりではありません。主は、よみにまで下ってくださいましたのです。

そんな主を知ることで、完全に満たされるのか。最後にどんでん返しのようなことを言うようですが、実はそうではありません。主はなんと言われましたか。「わたしはすぐに来る。」

なぜ来られるのですか。主にお会いしたときに、初めて完全に満たされるからです。今満たされているというのならこの方が来る必要はありません。ですから皆さんの心の中に満たされないという思いがあっても、それは当然のことです。

ではどうしてパウロは「満ち足りることを学んだ」と言うのでしょうか。ピリピの教会がパウロと困難を分け合ってくれたとき、そこにキリストのお姿を見たからではないですか。やがて主が完全に私を満たしてください。その前触れをピリピの教会に見たからではないですか。そのことを知ったので、ますま

すやがて来られる主をますます待ち望もう
としていく。そういうことではないでしょ
うか。

私たちも完全に満たしてくださる主を待
ち望んでいきたいと願います。